

## 熊本県立宇土中学校 平成30年度(2018年度)学校評価表

<p><b>1 学校教育目標</b></p> <p>熊本県教育委員会の「平成30年度県立中学校・高等学校における教育指導の重点」及び「平成30年度人権教育取組の方向」等を中心に据えながら、本校建学の精神である「質実剛健」のもと98年の伝統を継承しつつ、中高一貫教育校として新たな発展と創造をめざす。</p> <p>全職員は教育者としての自覚と使命感、教育的愛情と人権感覚を持ち、資質と指導力の向上に努め、生徒一人ひとりの個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、自ら考え、自ら行動し、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーとなる青年の育成に努める。</p> <p>中高一貫教育校としての利点を生かし、効果的な教育のあり方を研究するとともに、地域との連携をより一層深め、地域に開かれた特色ある学校づくりに努める。</p>
--

<p><b>2 本年度の目標</b></p> <p>①全職員が、資質と指導力の向上に努め、生徒一人一人を理解し、その個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、考え、行動する、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーを育成する。</p> <p>②中高一貫教育校として、魅力ある教育課程の研究を推進し、宇土校ならではの教育活動を展開する。</p> <p>③地域との連携をより一層深め、地域に開かれた特色ある学校づくりに努める。</p>
---

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	生徒一人一人を理解し、その個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、考え、行動する、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーの育成	生徒一人一人に対する深い理解と、個々の特性を生かした活動場の設定	校務のスリム化による生徒と接する時間増20%	・職員朝礼を週2回から1回に縮小する ・6限授業時の7限目相当時間帯を活用する	B	○中高合同の職員朝礼を縮減したので、中学校のみの打合せの時間を毎回確保できた。 ○放課後の学習指導や面談等の継続的な実施を通して、生徒理解と学習の意識付けにつながった。 △放課後学習会で指導する職員が固定化している現状がある。
		個々の生徒の理解度に応じた学習指導の実践	個々の生徒の理解度に応じた学習指導の実践	研究授業・公開授業を見直し、少人数グループによる研鑽ができるようにする	B	○少人数授業や習熟度別指導により、個々の生徒の理解度に応じた学習指導の実践ができた。 △学力の二極化は、本講の大きな課題である。
		生徒の主体性を育むための学習環境の確保	生徒の主体性を育むための学習環境の確保	体験活動「宇土未来探究講座」の効果的実施	B	○実施した体験活動を通して、生徒の主体性を高めることができた。 △実施時期に課題を残した。(無人島体験)
	地域に開かれた特色ある学校づくり	丁寧な広報と入学者選抜における志願者増	宇土中卒業生の100%宇土高入学、県立中学校入学者選抜における志願倍率2.0倍	・合同集会等を通して、高校の魅力を発信する ・1学期の時期から小学校訪問を実施する	B	○生徒及び保護者に、中高一貫教育校として、6年間の強みを説明し、学習成果を収めるという認識を深めることができた。 △県立中学校入学者選抜における志願倍率については、課題を残した。
学力向上	授業の充実と学習意欲の向上	全ての生徒が意欲的に授業に参加する授業の実践	生徒の理解度及び満足度90%以上の達成	・行事の見直し ・研究授業の改善 ・探究型授業の取組 ・ICT活用の推進	B	○2学期の授業評価においては、多くの教科がおおむね満足度90%以上、理解度80%以上を達成した。 ・満足度については、改善傾向にある。2年生の体育に課題を残した。
	自学力の育成	宅習時間の確保と定期考査の成績向上	・宅習時間の確保(平日:2時間以上、休日:4時間以上)	・宅習時間調査の充実(年4回) ・授業評価の充実(年2回)	C	○宅習時間は、前回調査より伸びが見られ、全国平均よりやや多い時間であった。 ・3年生はととも多かったが、目標には届かなかった。
キャリア教育(進路指導)	6年間を見通したキャリア教育	望ましい勤労観・職業観の育成	将来の展望を持ち、夢の実現に向けて努力する態度の育成、生徒の達成感90%以上	・職業講話 ・現場体験 ・系統的な進路研究	B	○職業講話などの回数や内容の見直しを各学年で行った。 ・生徒の達成感90%以上に直結させることは難しかった。
		将来を見通したキャリア構想	職業を見据えた進路目標の設定度90%以上	・大学入試に関する情報の提供 ・保護者会、二者面談、三者面談の実施 ・高校進路指導部との連携 ・パネルディスカッションの実施	B	○高校進路指導部からの大学入試情報に関する講話の実施は具体的な進路目標の設定に役立つ内容であった。 ○大学模擬授業や卒業生とのパネルディスカッションなどで生徒の進路目標を考える場は確保できた。 ・具体的な進路目標設定へつなげるのは難しかった。
	基本的生活習慣の確立	服装・あいさつ・掃除の徹底	全職員による生徒指導と生徒に寄り添った配慮ある対応の実践、充実度90%以上	・全ての指導における「凡事徹底」の意識涵養 ・学年集会時の整容検査と事後指導の徹底 ・生活委員会によるあいさつ運動の実施	B	○服装の乱れはほとんど見られない。名札忘れの生徒は継続が必要である。 ○キャプテン・部長会による週1回の挨拶運動を実施することができてきている。 ・掃除は真面目に取り組める生徒が多いが、指示待ちのところがある。

生徒指導		交通ルールの遵守とマナーの向上	交通ルール遵守率90%以上、交通事故・苦情0件	・定期的な交通指導 ・啓発用のチラシの作成と掲示 ・交通安全教室の実施	B	○自転車の違反は少なく、自転車小屋の整理整頓も良くなっている。
	自主性や社会性及び公共性を身につける	生徒会中心の行事の運営	生徒会主催の行事の企画・運営の充実、アンケートによる満足度90%以上	体育祭、文化祭、クラスマッチの見直しと、より一層の充実	B	○生徒が中心となり行事を計画し、お互いの考えをまとめて、取り組むことができるようになってきた。
		各種委員会活動の活性化	目標の明確化、生徒自ら動く委員会活動の実践、達成感90%以上	・生徒会執行部の主体による各種委員会の開催と合同会議の企画・立案 ・各種委員会の主体的な活動による活性化	B	○各委員会で常時活動に取り組んだり、集会で発表したりすることができてきている。
人権教育の推進	命を大切にすることを育む指導	他人を思いやり、いじめや差別を許さない態度の育成	人権意識、自尊感情の向上、自己肯定感90%以上	全教科・全領域において、教師はもちろん生徒相互間でも認め褒め励ます教育活動に取り組む	C	・いじめの件数について高校では7件、中学では11件あった。学校として認知したものは高校2件、中学0件だった。継続性はないが、学校全体でいじめを起こさせないための環境づくりなど予防的取組がより一層必要である。
	職員研修の充実	人権教育の基本的認識の確認と実践力の向上	職員研修の実践、校外の研修に全員参加、人権教育に関するレポートの全員作成	教育実践の相互研鑽を行い、人権問題に関する深い認識と実践力を併せ持った教職員集団づくりに取り組む	A	○人権教育の職員研修を校外外とも機会を設け、有意義な研修を行うことができた。職員に人権レポートを書いてもらう教育実践の交流研修の取組では昨年度よりも提出率が向上した。○人権問題に関する深い認識と実践力を併せ持った教職員の集団づくりに資する取組ができた。
特別支援教育	特別な支援を必要とする生徒への的確な対応	生徒の特性に合わせた支援	・生徒理解を踏まえた適切な支援の実践 ・個別の教育支援計画及び指導計画を基にした支援の充実 ・不登校傾向の生徒への支援と、カウンセラー室の効果的な活用	・特別な支援を要する生徒に対する全職員の共通理解を図り、環境整備に努める。 ・保護者やSC、SSWを始め外部専門機関とも協力・連携を図りながら、サポート会議やケース会議を開催するなど、組織的な支援を進める。 ・外部講師による職員研修を実施する。	B	○個別の支援計画指導計画を活用した共通理解の場を2学期に設けることができた。 △別室登校生徒への支援体制の充実が必要。
		ストレス反応を示す生徒への支援	・SCとの定期的な面談の実施 ・関係機関への引き継ぎ	・学校、家庭などの生活環境に起因するストレス反応を示す生徒をSCやSSWにつなぎ、ストレスへの対処方を学ばせる。	A	○教育相談の結果、必要な生徒をSCにつなぐことができた。 ○定期的な面談を実施し、ストレスへの対処法を学び安定した学校生活を送ることができた。
いじめの防止等	いじめ防止委員会主導による啓発	いじめを未然に防ぐため、また無くすために必要な主体的な態度の育成	人権意識、自尊感情の向上、いじめ0(いじめ解消率100%)	いじめ防止通信を年3回発行する。いじめに関するアンケートを年2回実施。心のきずなを深める月間及び人権週間で人権作文等を読む	C	・今年度こそいじめの件数を「0」にするという目標を年度当初に掲げたが、結果として学校としていじめと認知する事案が「2件」発生した。課題は「いじり」という行為と「ネット上でのトラブル」である。今後、より一層の啓発が必要である。
	職員研修の充実	いじめに関する基本的認識の周知徹底と生徒理解力の向上	教職員が主体的にいじめ問題について考えることができる。アンケートへの回答100%	いじめに関するアンケートを分析した結果を共有することで、研修効果を高める	B	○「心のアンケート」の生徒の意見から、生徒や職員がいじめ問題防止に対する課題が分析できた。その課題の解決に向けた具体的な実践が求められている。 ・今後、学校全体でいじめ問題の解決に取り組むというリーダーシップと雰囲気づくりが重要である。
地域連携(コミュニ)	地域に開かれた特色ある学校づくり	学校評議員会の充実	年2回の開催と、委員の満足度を高める内容の精選	学校評価に関するアンケート結果の検証と対策の提示	B	・多くの建設的な意見に答えられるように、今後具体的な取り組みが求められる。
		地域行事への参加率の向上	地域ボランティア・行事の広報と周知	ボランティアや行事への要請の周知徹底と、参加に対する柔軟な対応	A	○船場川清掃ボランティアへ継続的に多くの生徒が参加する等意識は高くなっている。 ・日常生活との温度差、日頃の生活態度(挨拶・掃除)の向上が課題。

ティースケールなど)		HP・ブログ配信の充実	見やすいHPの作成と充実、ブログの更新週に3回以上	ブログ入力方法の周知と記事を集める視点の涵養	B	○ブログ発信はタイムリーにできた。HPの担当者体制を整備しないと、情報発信が後手後手になる。
		防災型運営協議会の充実	宇土市との協定書の協議	宇土市の防災計画と本校の役割との摺り合わせ	C	○行事を調整し、運営協議会は1学期と2学期の2回の実施とした。地域連携の試案作りが課題である。
図書館活動	読書活動の活性化	貸出数の増加	生徒一人当たりの年間貸出数30冊以上	校内読書月間の実施(7、12月)、特設図書コーナーや展示の工夫改善	A	○貸出冊数7430冊(一人当たり31.1冊)で、目標数値を上回った。 ・今後は生徒の図書委員会活動を活性化し、更に貸出冊数を増やしていきたい。
	探究活動の拠点としての役割強化	図書館の利用者数の増加	1日当たりの図書館来館者数150人以上	広報誌『らいぶらいたいむず』の定期的発行、ホームページのブログでの情報発信	A	○4月から1月までの一日当たりの来館者数は174.6人、授業での図書館活用時間も111時間で昨年度より倍増した。今年度は『らいぶらいたいむず』特別号で新着図書案内を行った。
SSH	全校体制で展開する探究活動の実践及び探究の視点を授業に入れた、探究の「問い」を創る授業の実践	探究活動及び探究の「問い」を創る授業の実践の見える化”可視化”	職員の指導方法及び生徒の成果を可視化する機会を多く設定する	職員研修・成果発表会実施、研究集発行、LOGICガイドブック開発	B	○ロジック・ルーブリックとロジックガイドブックのコンテンツを関連付けたことで、生徒に身につけさせたい力は明確にできた。 △育てたい生徒像の到達度を測るロジックアセスメントの評価尺度の研究に課題が生じた。
		探究の「問い」を創る授業の実践を共有する機会を設定する	公開授業及び職員研修を実施する		B	○ロジック・ルーブリック及びロジックチェックリストを活用した生徒の自己評価、他己評価を行うことができた。評価の妥当性を高めるためのロジックアセスメントとの相関関係を得る必要がある。
中高一貫教育	中高一貫教育校としての魅力ある教育課程の研究と、宇土校ならではの教育活動の推進	生徒情報の中高間の共有	中高が連携した生徒理解と支援の充実	・生徒理解研修の中高合同開催 ・SCとの密接な連携	B	○生徒理解研修の実施で、共通理解は進んだ。中学教科担当者と定期的な情報交換の場を設けるとさらに良い。 ○SCとの密接な連携で、積極的な運用ができた。
			進路変更者数の減少	・別室登校の活用 ・二者面談、三者面談、家庭訪問の頻回実施	A	○別室登校の生徒は、行事に参加する等、改善傾向にある。 ○3年は、定期面談以外に、進路相談等、随時面談を行い、家庭と密接に連携できた。
		合同行事の活性化、連携した生徒会活動の実施	体育祭、文化祭等の合同行事における一体感の醸成と、満足度90%以上	・生徒会を中心とした行事の工夫と実践、全校集会の活用 ・保護者(PTA)と一体となった行事の工夫	A	○生徒主体の取組で、どの行事も成功を収め、生徒間の絆も深まった。 ○保護者会だけでなく、行事や授業でも保護者に参加を依頼したことは、学校理解につながった。

4 学校関係者評価

・学習環境が良く整えられており、生徒の姿勢も素晴らしい。授業をもっと見せていただきたいと思った。  
・「探究型の問い」から始まる授業は、「問い」の質がこれから研究されていくのでしょうか。学校生活の大半を占める授業評価について、生徒たちの自己評価が厳しい感じがした。何が原因で生徒たちがこのように評価しているのか理解を深めることで今後の取組の変更にも繋がると思う。先生方はとても一生懸命やっておられる。今後生徒の欲求と合致すると更に高みに進むことができると思う。生徒たちの評価が上がっていくことを期待する。  
・宅習時間と課題の質とバランスを調整する必要がある。「宇土中は大変」の声の本質を追求してほしい。  
・支援を必要とする生徒への対応は、スクールカウンセラーを巻き込みながら授業と関連づけて対応を深めてほしい。  
・私たち(大人)が思う以上に、生徒たちは生きる意味を探究しているし、私たちより素直に答えに気付く。子どもたちの可能性を更に伸ばしてほしい。  
・生徒の志願倍率が2.0倍で「B」という評価だが、「A」で良いのでは。  
・入学志願者の減少を心配している。これまで以上に学校訪問に力を入れて欲しい。  
・いじめを無くすことは難しいが、いじめが発生したことを早めに察知する事でより良い対処ができると思う。そのためには生徒一人一人に寄り添った指導をお願いしたい。

5 総合評価

学習環境の充実については一定の評価を得た。日頃の学びから身に付けた力が発揮されるSSH成果発表会においては、高校生と比しても遜色の無い取組が高く評価された。「探究型の問い」から始まる授業は、「問い」の質の研究が今後必要になってくると思われる。生徒による授業評価が項目によっては低位にあることから、振り返りが必要である。多様な課題や特性を持った生徒一人一人に対して、自己肯定感を高め前進につなげるような具体的な指導に努めた。

6 次年度への課題・改善等

授業の更なる改善と同時に、自宅学習の質を高め生徒の主体的な学びをどう展開させるのか、中高一貫教育校卒業後の進路目標達成に向けての学習と併せ、生徒に寄り添いながら丁寧な指導・助言と目標管理を推進していく。中高6年間を見据えた学びの道筋を、中高合同教科会を中心に課題と方向性の共有を図る。また、特別な配慮を要する生徒をはじめ、生徒の近況をスピード感をもって関係部署で連携・共有し、その都度適切な対応ができるような体制を構築する。校務改革については運営委員のリーダーシップが発揮されるような組織固めを行い、PDCAサイクルを確実に実践していく。